

Z会東大進学教室

直前早慶大世界史

【1回目】



問題

【1】

解答

ア 28 イ 34 ウ 37 エ 15 オ 38 カ 17 キ 2 ク 13
ケ 31 コ 6

解説

ギリシア～ローマ時代の哲学に関する問題である。哲学者を中心に文化史の内容が問題の中心だが、政治史も含まれる。政治史は基本的な問題なので、しっかりと正解しておきたい。哲学・思想の問題は、とくに慶應義塾大学では頻出なので、志望者はヨーロッパだけでなく中国の思想史についても入念な復習が必須である。

ア 空欄アは3カ所にあるが、最初の空欄からデモクリトスの名を導き出すのは難易度が高い。

問題文の4段落目に出てくる空欄アに注目してみると、空欄アの人物は原子論・唯物論を唱えた人物であることが書かれているので、デモクリトスが当てはまると考えることができる。

イ 基本なので確実に正解したい問題。問題文から、紀元前5世紀の後半に勃発し、この戦争中アテネが衆愚政治に陥ったという内容を読み取れば、ペロポネソス戦争が正解と判明する。

ウ やや難易度が高い。プラトンはアテネ郊外にアカデメイアを創設し、プラトンの死後も高名な学府として存続していたが、東ローマ皇帝ユスティニアヌス（位527～65）は、異教弾圧の名目でアカデメイアを閉鎖した。ローマ帝国最後の皇帝テオドシウス（位379～95）によるオリンピアの祭典の禁止や、ユスティニアヌスによるアカデメイアの閉鎖に見られるギリシアの伝統的文化の否定は、ギリシア・ローマ時代から中世のキリスト教中心の時代への過渡期であることを示す出来事だといえよう。

エ 基本事項なので確実に正解しておきたい。マケドニア王フィリッポス2世（位前359～前336）は、ペルシアに対抗するためのギリシア人の団結を主張したが、ギリシア人の中では反発も少なくなかった。そこでフィリッポス2世は強大な軍勢力をたてに前338年、カイロネイアでアテネ・テーベ連合軍を破り、コリントス同盟（ヘラス連盟）によるギリシア人の団結を実現させた。

オ ラファエロ（1483～1520）はイタリアのウルヴィーノに生まれ、フィレンツェでレオナルド＝ダ＝ヴィンチやミケランジェロらの影響を受けた芸術家で、前出の2人と並びルネサンス三大巨匠の1人。大学入試の面からいえば、数多くの聖母子画を描いたことがポイント。そして、本問の「アテネの学堂（学園）」は、ヴァチカンのシステイナ礼拝堂の壁画であり、その中でプラトンは天上を指差し、一方のアリストテレスは地上を指差している。これが理想論と唯物論という西洋思想の二大潮流を体現していることは覚えておきたい。図説等で確認すること。

カ マルクスの著書であるという点と、1848年に出版されたことから判断しよう。1848年という年代は、フランスで二月革命が勃発、ヨーロッパ中に波及し、新しいヨーロッパが形成されていくスタートとなった年なので、それと合わせて覚えておくこと。マルクスのもう1つの著名な著書である『資本論』が出版されたのは1867年以降なので不適切。蛇足であるが、マルクスの学位論文が、問題文にあるようなテーマだったことは一切覚える必要はない。

- キ 五賢帝時代はネルヴァ帝の即位が96年、最後のマルクス=アウレリウス=アントニヌスの治世が終了するのが180年なので、都合85年間にわたるものであった。選択肢が5年単位になっているため、年代が確実でないと自信を持って答えられなかったのではないだろうか。ローマ帝国に関しては、代表的な皇帝の治績とその在位年をもう1回見直してほしい。具体的には、アウグストゥス、ネロ、五賢帝、ディオクレティアヌス、コンスタンティヌス、テオドシウスである。余裕がある人は、ティベリウス、ヴァレリアヌス、セヴェルス、マクシミアヌス、ユリアヌスなども目を通しておけば、なおよい。
- ク やや細かい問題で、文化史までしっかり手が回っているかどうか、という学習到達度で差がつく問題。エピクテトス(55頃～135頃)は、ギリシア人奴隷出身のストア派哲学者。のちに解放されて『語録』(弟子のアリアヌスが編纂)を残した。自然の法則に現れる神の意志に自己を一体化させ、禁欲と自律の生活で魂の平安を獲得すべき、と主張して、哲人皇帝と呼ばれたマルクス=アウレリウス=アントニヌスにも影響を与えている。
- ケ クと同じく、差をつけるにはうってつけの問題。ローマ文化はギリシア文化の模倣で獨創性に欠ける、といわれるが、そのローマ文化で新しく生まれた哲学が新プラトン主義。もともとその名称からもわかるように、プラトンのイデア論を基調としているのであるが、ギリシア哲学を神学との関連で解明しようとした神秘主義的傾向を持つのが特徴である。
- コ アウグスティヌスがプロティノスの新プラトン主義を取り入れてカトリック神学の基礎を築いた、という内容はやや難度の高い事項である。この部分から該当人物を導き出せなくても、「教父」という言葉や「カトリック神学に取り入れられて、中世の神学に大きな影響を与えた」というくだりから、カトリック教義の確立に大きな役割を果たしたアウグスティヌスを推測することは、決して難しいことではないだろう。

【配点】 (計20点)

ア～コ 各2点

【2】

解答

- a パリサイ b コンスタンティヌス c グレゴリウス1世
d 聖像禁止令 e ヴォルムス協約 f アナーニ g アヴィニオン
h トマス=アクィナス
- 問(1) ミトラ教 問(2) デイオクレティアヌス 問(3) 告白録 問(4) カノッサの屈辱
問(5) a 問(6) フス 問(7) アンセルムス 問(8) ゴシック様式
問(9) ヴィッテンベルク 問(10) ジュネーヴ 問(11) ナントの王令 問(12) 首長法

解説

- a 紀元前後に生まれ、ユダヤ教の律法主義や選民思想を批判し、神の絶対愛と隣人愛を説いたイエスに対して、パリサイ派・サドカイ派・律法学者・大祭司・長老らユダヤ教徒の指導層は反感を抱いた。パリサイ派は、律法の遵守に固執する一派であり、イエス迫害の中心となった。サドカイ派は、イェルサレム神殿の祭司を務めた一派である。
- b・問(2) 外来宗教に対して寛大であったローマ帝国が、キリスト教徒を迫害したのは、彼ら

が皇帝崇拜を拒否したからである。とくに、ネロ（位 54～68）の迫害（64）とディオクレティアヌス（位 284～305）の迫害（303）が名高い。しかし、増大するキリスト教徒を敵に回すのは、帝国の統治にとって得策ではないとの判断から、コンスタンティヌス（位 306～37）は 313 年、ミラノ勅令でキリスト教を公認した。

c 大教皇と称されるグレゴリウス 1 世（位 590～604）は、教皇権の確立、聖職売買の禁止、異端の根絶に力を入れる一方、ゲルマン人への伝道を強化した。

d ビザンツ皇帝レオン 3 世（位 717～41）が、726 年に発した聖像禁止令は、ゲルマン人への伝道などのために、聖像を利用していたローマ教会の反発を招いた。これを機に東西教会は対立を深め、1054 年には完全に分離した。

h・問(7) スコラ哲学では、实在論と唯名論が対立して普遍論争が起こった。实在論はイギリスのアンセルムスらが主張したもので、神や普遍の観念は事物とは別に存在するとした。これに対し、唯名論はフランスのアベラールやイギリスのウィリアム=オブ=オッカムらが出た立場で、神や普遍などの観念は名目にすぎず、实在するのは事物だけであるという考え方である。この論争は中世末まで繰り返された。また、イスラーム世界やビザンツ帝国において発展を見たギリシアのアリストテレス哲学の導入によって、13 世紀にはイタリアのトマス=アクィナスがスコラ哲学を大成した。彼は『神学大全』を著して、信仰と理性との問題に解決をもたらした。

問(3) 教父アウグスティヌスは、自らがマニ教から回心してキリスト教徒となった経緯を『告白録』に記した。また、『神の国』では壮大なキリスト教歴史哲学を樹立した。

問(4) 西欧で封建社会が確立する過程で、ローマ教会は土地の寄進を受け、政治的には支配階級となって世俗化が進み、墮落・腐敗した。このため、11 世紀頃から、クリュニー修道院を中心に教会の改革運動が展開された。グレゴリウス 7 世（位 1073～85）は、この改革運動の影響から、聖職売買や聖職者の妻帯を禁じた。さらに、教会への世俗権力の介入を排除するため、聖職叙任権をめぐる神聖ローマ皇帝ハインリヒ 4 世（位 1056～1106）と争い、皇帝を破門して屈服させた（カノッサの屈辱）。

問(5) インノケンティウス 3 世（位 1198～1216）は、離婚問題でフランスのカペー朝のフィリップ 2 世（位 1180～1223）を破門し、カンタベリー大司教叙任問題ではイギリスのプランタジネット朝のジョン王（位 1199～1216）を破門した。一方、神聖ローマ皇帝位をめぐる争いでは、フリードリヒ 2 世（位 1215～50）の擁立に成功するなど、世俗君主を押さえて教皇権の絶頂期を現出した。なお、インノケンティウス 3 世が提唱した第 4 回十字軍（1202～04）は、ヴェネツィア商人が主導権を握り、商敵であったコンスタンティノープルを襲撃・占領し、ラテン帝国を建国した。

問(9) 1517 年に九十五カ条の論題を発表して宗教改革を始めたマルティン=ルターは、12 年以來、ドイツ中部のヴィッテンベルク大学の神学教授であった。

問(10) 『キリスト教綱要』を著したフランス人カルヴァンは、16 世紀中頃、スイスのジュネーヴに招聘され、宗教改革を進め、キリスト教の理念を基に政教一致の神政政治を断行した。なお、これに先立って、スイス人のツヴィングリは、チューリヒで改革を行った。

問(11) フランスの宗教内乱ユグノー戦争（1562～98）は、ブルボン朝を開いたアンリ 4 世（位 1589～1610）によってナントの王令が発令されて（1598）終結した。ナントの王令は、新

教徒のユグノーにも旧教徒とほぼ同等の権利を与えたもので、近代ヨーロッパで初めて個人の信仰の自由を認めたものであった。しかし、ルイ 14 世（位 1643～1715）が 1685 年に廃止した。

問(12) ヘンリ 8 世（位 1509～47）は、王妃カザリンとの間で離婚問題が生じたが、ローマ教会の許可を得られなかった。このため、1534 年に首長法を發布、イギリス国内の教会・修道院の首長は国王であることを宣言し、ローマ教会からの分離をはかった。

【配点】（計 32 点）

a～h 各 1 点 問(1)～問(12) 各 2 点

【3】

解答

a 02 b 28 c 10 d 25 e 13 f 24 g 21 h 27

i 31

(ア) 2 (イ) 1 (ウ) 5

解説

a ベルギーの歴史家ピレンヌは、7 世紀以降のイスラーム勢力の進出によってヨーロッパ内部に新しい世界が誕生したと論じた。彼は 800 年のカール大帝による西ローマ帝国の復興が中世ヨーロッパ世界の成立の始まりであったと見なし、“マホメットなくしてシャルルマーニュ（カール大帝）なし”という言葉を残した。

b 中世の農業革命と位置づけられる技術革新としては、重量有輪犁の普及、農具における鉄部品の拡大などが挙げられる。重量有輪犁が普及すると、耕地を深く耕すことが可能になって生産力が増大した。

c 三圃制は 3 分した耕地を春耕地・秋耕地・休耕地とし、年ごとに順次利用して行って 3 年で一巡する農法である。

d・e 中世封建社会の下で、農奴は領主に対して賦役・貢納の義務を負い、結婚税・死亡税などを支払ったほか、領主裁判権に服した。また教会に対しては、十分の一税を支払うことを強制された。

f ハンザ同盟は、1358 年に都市同盟としての形を明確にし、リューベックを盟主として、ロンドン・ブリュージュ・ベルゲン・ノヴゴロドに在外商館を置いた。最盛期には同盟都市の数は 100 を越えたが、三十年戦争の過程で衰退していった。

g ドゥームズデー=ブックは、1085～86 年にウィリアム 1 世（位 1066～87）が徴税の目的で作成させた土地台帳であり、イングランドのほぼ全域にわたって、きわめて詳細な記録を残した。

h ペスト（黒死病）は、1346 年から 50 年にかけて、全ヨーロッパで流行した。イギリスやフランスでは、全人口の 3 分の 1 が死亡したといわれている。

(ア) 732 年、地中海南岸からイベリア半島を越えてヨーロッパに侵入してきたイスラーム軍を、フランク王国の宮宰カール=マルテルがトゥール=ボワティエ間の戦いで破って駆逐した。

(イ) 12 世紀から 14 世紀にかけて、ゲルマン系の人々によってエルベ川以東のスラヴ人居住区

などに、軍事的色彩の濃い植民が進められた。これを東方植民といい、12世紀にはブランデンブルク辺境伯領、13世紀にはバルト海東岸にドイツ騎士団領などが成立した。

- (ウ) 1381年、人頭税の負担に対する農民の不満を直接的契機として、イングランド東南部を中心に全国規模でワット=タイラーの乱が起こり、農奴制廃止や地代の固定化などを王に約束させた。

【配点】(計12点)

a～i 各1点 (ア)～(ウ) 各1点

【4】

解答

a イタリア b ヴェネツィア c 製紙 d ジョルダノー=ブルーノ

問① トスカナ地方 問② ボッティチェリ 問③ 天地創造 問④ ブリュエール

問⑤ セルバンテス 問⑥ トマス=モア

解説

a イタリア戦争(1494～1559)は、イタリア支配をめぐる神聖ローマ皇帝カール5世(位1519～56)とフランス国王フランソワ1世(位1515～47)の抗争を中心に断続的に行われた戦争で、ローマ教皇なども関与した。1527年には、教皇と敵対した神聖ローマ帝国軍がローマを占領・掠奪した。

b 16世紀に入り、イタリア戦争の影響や大航海時代の到来でイタリア諸都市が荒廃・没落すると、ルネサンスの中心はイタリアからアルプス山脈以北へと移った。しかし、イタリア戦争の影響を受けなかったヴェネツィアでは、画家のティツィアーノやティントレットが活躍し、イタリア=ルネサンスの最後の輝きが見られた。

c 製紙技術と活版印刷術の結びつきにより、16世紀に入ると書物の発行量が急増した。最大のベストセラーは各国語訳の『聖書』である。これと併せて、ルターの著作も多数発刊され、彼の思想が多くの人に広められ、宗教改革にも大きな影響を与えた。

d ジョルダノー=ブルーノ(1548～1600)は南イタリアの生まれで、ドミニコ会の修道院に入ったが、異端的な思想を疑われて、異端審問所から召喚命令を受けると逃亡し、ヨーロッパ各地を放浪した。彼はコペルニクスの地動説を支持したほか、宇宙無限論を展開した。結局、1592年にヴェネツィアで捕えられ、1600年に火刑に処された。

問① ダンテ(1265～1321)が活躍した当時のイタリアは、分裂状態にあり、神聖ローマ皇帝派のギベリント、ローマ教皇派のゲルフが対立していた。この頃のフィレンツェでは、ゲルフがさらにビアンキ(白党)とネリ(黒党)に分かれて対立しており、前者の側であったダンテは政治抗争に巻き込まれ、ネリによってフィレンツェから追放された。彼は、各地を放浪しつつ、1304～21年にトスカナ語で『神曲』を著した。トスカナ語は、フィレンツェを含むトスカナ地方の俗語(口語)で、ダンテ・ペトルルカ・ボッカチオらが作品に使用したために急速に普及し、現在のイタリア語の基となった。

問② 画家のボッティチェリ(1444頃～1510)は、フィレンツェのメディチ家の保護を受け、「ヴィーナスの誕生」「春」などを初め、多くの作品を残した。

問③ ローマ教皇ユリウス2世(位1503～13)にシスティナ礼拝堂の天井画の製作を依頼さ

れたミケランジェロ（1475～1564）は、最初、自分の本質は彫刻家であり、壁画の技法には通じていないと断ったものの、教皇に聞き入れられず、ほとんど1人で天井画の製作に取り組み、1512年に「天地創造」を完成させた。

問④ ブリューゲル（1528～69）は、ネーデルラントで活躍した農村出身の画家で、当時の画家としては例外的に農民の生活を題材とした絵も描いた。

問⑤ セルバンテス（1547～1616）は、スペイン＝ルネサンスを代表する作家で、17世紀初頭に『ドン＝キホーテ』を著した。これは近代風刺文学の先駆的作品といわれている。

問⑥ 15世紀末～17世紀前半のイギリスでは、毛織物の需要拡大を背景に、牧羊地確保の目的から、議会の禁止を無視して第1次囲い込みが行われた。こうした状況を、人文主義者のトマス＝モア（1478～1535）は、『ユートピア』（1516）の中で「羊が人間を食い殺している」と表現して批判した。

【配点】（計16点）

a～d 各1点 問①～問⑥ 各2点

【5】

解答

- (1) パータリプトラ→プルシャプラ (2) トルコ系→イラン系 (3) 烏孫→大宛
(4) 長安→広州 (5) 仏国記→南海寄帰内法伝 (6) 火薬→製紙法
(7) フィリップ2世→ルイ9世 (8) ソンガイ王国→マリ王国 (9) 鄭成功→鄭和
(10) 皇輿全覧図→崇禎暦書

解説

- (1) パータリプトラ（現在のパटना）は、マウリヤ朝（前317頃～前180頃）の都である。クシャーナ朝（後1世紀～3世紀）の都プルシャプラ（現在のベシヤーワル）は、中央アジアからインドへと通じるカイバル峠東麓の要衝として古くから栄え、クシャーナ朝の時代にはガンダーラ美術が盛んとなった。
- (2) アム川・シル川に挟まれたソグディアナは、古くから東西交通の要衝であり、イラン系のソグド人は中継貿易で活躍した。彼らはゾロアスター教・マニ教などの宗教を中国に伝える役割も果たした。
- (3) 武帝（位前141～前87）の命令で中央アジアに赴いた張騫は、フェルガナ盆地の大宛では汗血馬と呼ばれる良馬が産出されることを伝えた。これを獲得することを命じられた李広利は、大軍を率いて大宛を攻撃し、多数の良馬を得た。烏孫は天山山脈北方のイリ川上流域を拠点とした遊牧民族で、張騫の来訪後は漢と同盟した。
- (4) 市舶司は、玄宗（位712～56）の時代に広州に初めて設置され、宋代には泉州・明州・杭州などにも拡大された。
- (5) 671年、唐の義浄は広州より海路でインドに赴き、約20年にわたる滞在ののち、海路で帰国した。帰途スマトラのシュリーヴィジャヤで、『南海寄帰内法伝』『大唐西域求法高僧伝』を記した。『仏国記』は陸路でインドに赴き、海路で帰国した東晋の僧法顕の著作である。
- (6) 751年、タラス河畔の戦いで紙漉き工が捕虜となったことから、製紙法がイスラーム世界

に伝わり、さらにヨーロッパへと伝わっていった。火薬は金・元で実用化されて実戦に用いられた。

- (7) ルブルックはフランス出身のフランチェスコ派修道士で、フランス王ルイ9世（位1226～70）の命で1253年にモンゴルに派遣された。フィリップ2世（位1180～1223）は、フランスの集権化を推進した国王で、イギリス王ジョン（位1199～1216）から大陸内のイギリス領土の大半を奪った。
- (8) イブン=バトゥータは1325年にタンジールを出発し、メッカに巡礼した後、イラク・小アジア・インド・スマトラなどを経て、元朝支配下の大都に入った。彼は帰国後、ナスル朝の都グラナダを訪問し、さらにニジェール川流域のマリ王国（1240～1473）を訪問した。ソングアイ王国（1464～1591）は15世紀後半から16世紀末にかけてニジェール川流域を支配し、内陸貿易で繁栄した国家である。
- (9) 明の第3代皇帝永楽帝（位1402～24）は、イスラーム教徒の宦官である鄭和に命じ、15世紀初頭から半ばにかけて、数回にわたり南海諸国遠征を行わせ、船隊の一部はメッカやアフリカ東岸のマリンディにまで達した。鄭成功は明の滅亡後に清朝と抗争を展開した武将で、17世紀半ばにはオランダ勢力を駆逐して台湾を根拠地とした。
- (10) 明末の官僚・学者であった徐光啓は、イエズス会宣教師アダム=シャルらとともに暦を改善するための事業を進め、『崇禎暦書』を作成した。清朝では『崇禎暦書』に修正が加えられ、時憲暦として施行された。『皇輿全覧図』は清朝の康熙帝（位1661～1722）がイエズス会宣教師のレジス、ブーヴェらに命じて作成させた中国最初の実測地図である。

【配点】（計20点）

- (1)～(10) 各2点（完答）



会員番号	
------	--

氏名	
----	--